

## ヒュームの学芸観

萩 間 寅 男

小論において、哲学者にして歴史家であるデヴィッド・ヒュームの学芸の歴史にかんする考察を取り上げ、そこに示されるヒュームの学芸観を解明することを試みてみたい。

### (一)

ヒュームが読書界に名を得たのは、1741年の『道徳及び政治小論集』<sup>(1)</sup>（以下『小論集』と略す）<sup>(2)</sup>の著者としてであった。「死産」(7:2)した処女作『人性論』出版の翌年に、本来「週刊紙」(5:41)として構想していた小論をかき集め出版したという。好評を博した『小論集』は次の1742年に再版され、さらに同年のうちに第二巻<sup>(3)</sup>を上梓する運びとなった。以後絶筆となつたいわゆる「R」版まで、体裁を若干変えて都合十一版を重ねた。

『小論集』は初めの二巻本に27点を収録したが、最終的には39点を収め、初めからのものは19点である。大きく区別するならば、追加の主力は1752年に『政治論集』(H版)<sup>(4)</sup>として独立に刊行されたものである。それらは、1758年に『著作集』(M版)<sup>(5)</sup>出版時に、『小論集』第二部として取りいれられ、従来の一、二巻はまとめて第一部とされた。内容的にみるならば、第一部には一般的な題材が多く、初版には「恋愛と結婚とについて」、「人生の半ばについて」などという小論がおさめられていたが、これらは後に削除され、「出版の自由について」「政治を科学に高めるために」などの政治・社会的関心の強いものが一貫して掲載される。第二部となる『政治論集』には、より特殊な政治・経済評論が多く、「商業について」「貨幣について」さらに「古代人口論」などの小論が収められた。なお、1748年に『三小論集』<sup>(6)</sup>として別箇に出版された「原始契約について」「絶対服従について」「国民の性格として」の三小論が、同じ年の「D」版に増補収録されている。それぞれの小論には、細部に多数の異同があり、また表現を変更したものもあるが、それらには今は立入らない<sup>(7)</sup>。

それより今ここで注目すべきは、上に管見したような多数の追加・削除、細部の変更のなかにあつて、ほぼ平行した主題が、第一部と第二部とにおいてそれぞれ取扱われていることである。すなわち第一部には、初版以来「芸術および学芸の生成と進展とについて」と題し、第二部には初め「生活洗練について」(H版)と題し、1760年に「N」版において「技芸の洗練と進歩とについて」と改題されて収められた小論において、それぞれ学芸の歴史を考察している。前者は一般的な関連において、後者は特殊に政治・経済的な関連において、約十年の隔りをおいた学芸の

歴史にかんする考察である。

ところで、学芸の歴史ないし古代・近代の学芸についての考察は、イギリスにおいてベーコン以来の伝統を有し、十七世紀末には碩学ベントリやスウィフトも加わっている<sup>(8)</sup>。当代においても、古代・近代にかんする比較はなお形を更め興味をもたれていたことは、ヒュームによる「古代人口論」<sup>(9)</sup>において明らかである。これを背景として、ヒュームが約十年の隔りをおいて、一般的な関わりにおいて捉えた学芸の歴史と、政治・経済との関わりに注意して草したそれとを比較検討することを通じて、一体ヒュームが学芸の本性をいかなるものとみていたかを解明してみたい。

## (二)

「学芸の生成と進展とについて」と題する小論をヒュームは「人間の営為によって成立つ偶然または未知の原因」にもとづく事象と「原因」に由来する事象とに区別することから始める。この区別を行うに助けとなる何らかの「一般原則」は、

「その生起を少数の人間に左右される事象は大体において、偶然あるいは、隠れた未知の原因に帰すべきである。他方、きわめて他数の人間が関わっているのでなければ生起せぬ事象は、一定の既知の原因によって説明できる場合が少なくない。」(5:174-5)

というものである。すなわち一国における重大な変化についてみるならば、「国内的な原因による、しかも徐々に進行してゆく大変化」は「国外的な原因による、しかも、急激に進行する大変化」よりも「理論的考察と経験的観察」の主題としてより適切であると主張する。同じ理由にもとづきある国における「商業活動の勃興と発達とを説明することの方が、学芸の生成と発展との原因とを明かにすることより容易」(5:176)だと付け加える。しかし、学芸の歴史はすべて偶然に支配されていると断定することを、「思い止まる。」その理由として、「学問の発展に献身する人々はずねに少数であるとはいえ」、これらの持つ気質および才能と「同質の気質と才能」とが、「当の学問の生成する国民の間に」分有され、「それらの作家たちの審美力と判断力とを生成させ、形成し、そして伸長させる下地となるということが必ずなければならない」(5:177)ということをかれば挙げる。すなわち「芸術および学問の生成と発達とにかんするわれわれの問題」は「一国民全体の審美力と才幹と気質とにかんする問題であり、したがって一般的な原因および原動力によって説明することが、或る程度まで、可能」(5:177)とヒュームは主張する。

以上をふまえて、「経験事実を考察することにより到達した〔四の〕一般的な法則」を提示する。それはすなわち

i) 「学芸が始めて生成する場合、……その国民が自由な政体のもたらす恵みを享受するので

なければ、それは不可能である」(5:177)

- ii) 「多数の国家が互いに近接し合いながら相互に独立を保ち、商業活動と政策とによって結ばれ合う、という事態ほど、芸術と学問との生成にとり、好都合なことはない」(5:181)
- iii) 「それらの高貴な植物が生成し成長するのに適した唯一の場は自由な国家であるとはいえ……移植ということになると、それは如何なる政体にも移植することができる。そして、共和制の国家は学問の発達に最も適しており、文明的な君主制の国家は芸術の発達に最も適している」(5:1845)
- iv) 「芸術と学問とは、……その国において完成に到達するその瞬間から自然に、いやむしろ必然的に、衰退へと向い、しかも、かつて芸術と学問とが栄えた国においてそれが復活し再び栄えるということは殆どない」(5:195)

という四原則である。これらの四原則のうち根本となるのは、学芸の生起の最初の条件を示す「自由な政体においてのみ学芸は繁栄する」という、第一の原則である。君主制の下、臣民すなわち奴隷である人々の間では学芸は繁栄しない(5:179)。これに対し、自由な政体、共和制の下では必ず法が生じ、法は安心感を生み、知的探究心が生まれ、事態の進展の後段は「より多く」偶然に支配されるとはいえ、知識を生み出す(5:179)。良い意味での競争が盛んになり学芸が栄える(5:180)というものである。

第二の原則は、明らかに古代ギリシアの経験を念頭におき、当代のヨーロッパをその大型版に擬す(5:183)。国土の狡隘は、政治権力・精神的權威の伸長肥大化を阻み、思想・批評の自由を確保し、日々の競争心は趣味判断と理論的思考とにかんする問題における基準また規範を吟味して受け入れるようにする(5:182)。古代ギリシアにおける地理的に近接しつつ分断された独立の小共和国には「一体感」と「競争」(5:182)とが生まれた。他方、事実上一つの国家であるローマ教会の下では、「あらゆる種類の学問活動の完全な退廃」(5:182)を迎えた。今やヨーロッパは、「ギリシアの昔に近い状態」に戻り(5:183)、デカルトやニュートンの説を批判的に検討したのはそれぞれ他国の者たちであり、それらの吟味された長所だけがこれからも受け入れられることになろう(5:183)と示唆する<sup>(10)</sup>。さらに地理的な分断にならべて、歴史的に分断された事情が考量される。すなわちさまざまな時代に見られる連続性の中断は、学問と芸術の連続性の中断よりも、權威の蔓延を阻止するという点で「むしろ好都合」(5:184)と云われる。

なお興味深いことは、付け加えられた中国にかんする考察である。すなわち、高度の水準の知識の蓄積にもかかわらず、一つの言語、一つの法の下にある、一つの巨大な帝国である事情が中国において知識の停滞を招いたこと、しかしながら外敵の脅威が少ないことは、民兵同然の常備軍しか必要とせず、官僚による支配を可能とし、王権に付随する安定と民主的議会の自由の両面

を相対的に実現した(5:183)という考察は、現代における観察<sup>(11)</sup>とも一致する鋭いものである。

残る二つの「原則」は前の二つに比較するならば、むしろ「経験則」ないし「経験的事実」と称すべき一般的なものに止まる。学芸が移植しうるものであるという主張も、一度で開花した学芸がまた必ず衰退するという主張も、原則としてはあまりに一般的であり、無内容である。

### (三)

「技芸の洗練と進歩とについて」と題した小論において、ヒュームは次の二点を証明して、「生活洗練」luxury に対する極端な見解の誤りをただすことを目指す。証明すべき二点とは、第一に、

「生活洗練の存する時代は最も幸福な時代であるとともに最も有徳な時代である」

第二に、

「生活洗練が罪のないものでなくなる場合には常に、それは有益なものでなくなることで、そして度を過すときそれは国家にとり、……有害である」(5:300)

ことである。

第一の立証は、公私の生活における生活洗練の及ぼす影響をみれば容易と云われる。「生産活動が活発に行われ諸々の技芸が栄える時代には……手にする報酬としては、活動の成果としての身心の快を享受するだけでなく、そうした活動への専念そのものを一つの喜びとして享受する」と指摘される。さらに生産活動と機械的な技芸における進歩発達は、そのような活動が「学芸におけるそれなりの進歩発展を促すという好都合」をもたらす。「いいかえると、一方が完成の極致に到達するためには他方におけるそれなりの発展が伴わなくては不可能である」(5:301)ということである。そこで「生活洗練の度より高い時代に固有の特質」は「生産への熱意と知識に対する欲求と人間らしい感情とが互いに断ちがたい鎖でつなぎ合わされ」(5:302)ていることであると断定される。この三者の結合の有益な影響は、公生活、私生活のいずれにもみられる。「私人の罪のない欲望」の満足は一種の「労働貯蔵庫」となり、有事の際には「軍用にも振り向ける」(5:302)と云う。生産活動は学問活動により「大幅に促進され」、他方この学問活動は国家に対し「被治者の生活活動を最大限に活用し得る道」すなわち被治者が「さまざまなより平俗な技芸における使用を通じ練磨される」状態、要するに「政治的支配における寛容と穏健」(5:303)の実現へと働く。

ヒュームは更に進んで、「厳格なモラリストたちに技芸の進歩発展を非難させてきた主因はあの古代ローマの例にある」という通説に挑戦する。いわゆる通説は、古代ローマは、

「生活の貧しさと質朴さに加え有徳と愛国の精神とをあわせ維持しているとき、国家の偉大と私人の自由とにかんしあのような驚くべき高みにまで上昇した。しかし、その征服した属領からアジア的奢侈を学ぶようになってからというもの、この世のありとあらゆる退廃へと転落してゆき、そうした退廃が原因となって暴動と累時の内戦とが発生し、ついには自由そのものをも完全に喪失するにいたった」(5:305)

とみる。しかし、ヒュームは真の原因は、

「実際には政治組織上の欠陥と果しない征服戦争とから生じている事態であり、それを奢侈と技芸とに」(5:305)

見誤っていると主張する。ヒュームは云う。

「技芸における進歩は自由にむしろ有益であり、自由な政体を生み出さなくともそれを保持してゆく傾向を技術における進歩は本来持っている。」(5:305)

生活の洗練は、農業者にも商業者にも「富を入手し社会に独立する」または「社会的富の分け前にあづから」せ、「公的自由の最良で最堅固な基礎であるあの中産階級に勢威と威信とを集める。」中産階級が、それゆえに切望するのは、彼らの財産を保障しさまざまな圧制から彼らを防衛する「平等な法」(5:306)であるとする。当時のポーランドとイングランドやフランスとの差異も、このような意味で理解されなければならないというのである(5:306)。

第二の立証の要点は既に第一の証明のうちに示されている。ヒュームはいう。

「人間本性には、怠惰、利己、他者への無頓着という奢侈以外の悪徳があり、奢侈はそれらの悪徳を矯正する役割をある程度まで果す」(5:308)

すなわち「ある毒は別の毒の解毒剤たり得る」と主張する。過度の生活洗練は「多くの害悪の源泉となる」が、それは「一般的にいうと、怠惰や無為よりはまさる」とみる。この二つは「私人と国家の双方にとっていっそう有害」(5:309)であるとみるからである。

#### (四)

要するに、ヒュームは1741年の小論において「自由な政体においてのみ、初めて学芸は生成する」と主張し、約十年後の小論において「生産活動が活発で技芸が栄える時代は、有徳で幸福な時代であり、それが学芸の進歩を促す」と主張している。学芸の進歩にとって、「自由な政体」か「生産活動が活発で技芸の栄える」ことのいずれが、有益であったか、十年の年月を隔てかれ

の認識に変化があったことが窺われる。しかし、いずれにしてもヒュームが、自説の根拠として古代のギリシアまたローマを引くことは事実である。

ところで、ヒュームの古代ギリシアやローマ、また近代ヨーロッパにかんする「経験事実」の把握は、上にみた二箇処に限られない。1741年の初版時に「自由と専制とについて」と題され、1758年のM版刊行時に「市民的自由について」と改題された小論において、ヒュームは、

「芸術と学問とはそのすべてが自由な国々において生成したこと、それらの喜びを驚歎すべき完成にもたらしたのはギリシア人であること、しかも彼らギリシア人は、貧窮を必然的に伴う間断なく連続する戦争のさ中で、それをなし遂げたということは古代の作家たちが既に注目し言及している事実」

であると指摘し、さらに

「ギリシア人が自由を喪失したとき、アレクサンドロスの一連の征服活動により、ギリシア人の富は激増するとはいえ、自由喪失のその瞬間から、学芸は彼らギリシア人の中では衰退し…学芸はローマへと、すなわち、世界において当時唯一自由な国家へと移植されてゆく。そしてこの全く以て好適な土壌と出会うことにより、一世紀以上もの間、学芸は目を見張らせる程急速に発展する。しかし、自由が衰退すると、それは学芸の衰退をもたらした」(5:158)

と述べ、ロンギノスの主張すなわち、

「学問と芸術とは自由な国家以外においては決して繁栄することができない」(5:158)

というそれに疑問を呈する。ロンギノスの断定は二つの経験的な証拠すなわち「人民本位の民主的な国家において学芸は興隆」し、そして「専制を事とする絶対的な国家においては学芸は没落する」(5:158)という過去からの観察に十分裏付けられていると信じられ、イギリスで幾人かの追随者を得ているが、ヒュームはこれらを

「その視野が古代の事実にもっぱら限局されているか、そうでなければ、われわれの間で確立を見ている例の政治形態に対し過度の偏愛を抱いているか、のいずれか」(5:158)

と批評する<sup>(12)</sup>。メディチ家支配下のフィレンツェ、当時のフランス、ドレスデンという確立された自由が殆ど享受されたことのない国において、実際に学芸が「ほぼ完成に近い域」(5:158)に発達している。

他方商業は「自由な政体を自らの落着先と定めていることに気づかさ」(5:159)れる。ヨーロッパの三大都市ロンドン、アムステルダム、ハンブルクは、「自由な都市であるとともに、プロ

テストントの都市でもあり、つまり自由を二重に享受している都市」(5:160)であるが、近年人々はフランスの商業活動に対し「強い警戒心」を抱くようになってきている。すなわち、学芸が自由な政体以外において決して繁栄しないという見解に比して、商業の繁栄にかんする見解は、より「長期的でより広汎な経験」に基いているかに思われるが、「絶対的な妥当性を持つものではない」とし、要するに「確実な結論への到達がかくも至難な問題」とする。なおヒュームはこの点に「敢えて口出し」をすれば、「絶体政体の国々において商業活動に衰退の傾向のある理由」は、一般に云われる「私有財産への保障が確実でないこと」でなく、「商業活動に対する尊敬がそれほど厚くないこと」に起因するという。すなわち絶体政体は、「階層制」を絶対に維持するゆえに、身分を生産活動と富よりも尊敬する、つまり商人が商業活動から「足を洗う」(5:160)傾向を指摘する。

### (五)

さて上にみたように、ヒュームは第一の小論において「自由な政体においてのみ、始めて学芸は生成する」と主張し、第二の小論において「生産活動が活発で技芸が栄える時代は、有徳で幸福な時代であり、それが学芸の進歩を促す」といい、第三の小論ではそれは「絶対的妥当性をもたず」、「確実な結論への到達がかくも至難な問題である」とする。一体ヒュームの真意はどこにあるのか。その解明のまえに、いままで管見してきた「経験事実」ははたして的確であったのか問わなければならない。さらにそもそもヒュームは学芸の本質をどのようなものとみていたか明らかにしなければならない。

「経験事実」についていえば、学芸が栄えたといわれる古代ギリシャやローマのいつの時期を精確にヒュームが指すか判然としない。ギリシアが「近接し合い相互に独立を保ち、商業活動と政策によって結ばれた」といわれる時代は、ペルシア戦争後のアテナイが盟主の地位についたペリクレス時代であり、アナクサゴラスの時代である。他方、ギリシアが「間断なく連続する戦争のさ中」で「学問芸術を完成にもたらした」といわれる時代は、ペリクレスの最晩年からの数十年つまりペロポネソス戦争の時期が思い浮ぶ。「貧窮を必然的に伴う」と称されるならば、アテネが興隆に向うペルシア戦争後のペリクレスの時代を指すとは考えられず、プラトンが流浪の旅を続け、デモステネスがマケドニアの脅威を説くポリス世界衰亡の時代をいうとも考えられるが、これは「二つ」の最盛期を想定することになり、第四原則すなわち学芸は完成から衰退へと向うという原則に反する。比較すると第三の小論の主旨が、今日われわれが解する歴史的事実と離れることが少ないが、第一、第二の小論が加筆修正されず、相異なる「歴史事実」が並記されているという事実は遥がない。

古代ローマについて、第一、第二の小論が触れることは少なく不明な点はみられない。他方、

第三の小論において、ギリシアが自由を喪失した後「学芸は当時唯一自由な国家であったローマへ移植される」といわれる。しかしこの指摘が、適切であるかは検討の余地がある。

ギリシア衰退の後であって、ローマが自由あるいは十全な意味で共和制であった時代は短い。ヒュームが挙げる「文明人」ピュロス王がローマ人を見て「軍隊規律の点ではこの野蛮人どもはちっとも野蛮ではない」(5:304)と称讃したのが、前275年のことであり、第四次マケドニア戦争の結果としてマケドニアを属州としたのは、カルタゴを破壊したのと同じ前146年のことである。ローマにおいて、ヒュームの云う「政治組織上の欠陥」を是正すべく、グラックス兄弟の改革つまり平民党が追いつめられて立上ったのはその十年後のことであった。しかしながらピュロス王との会戦は、既に中部イタリアに地歩を固めた共和制ローマの南イタリア制圧戦略の一環であり、カルタゴとの約百年間の死闘へと続く「果しない征服戦争」の一部であった。つまりピュロス王との会戦からマケドニア・カルタゴ征服までの百十数年間にローマが「政治組織上の欠陥と果しない征服戦争」を続け、その後の混乱の原因をつくったのは確かである。しかし、他方では、ヒュームは、この時代を「当時唯一自由な国家」であったローマに学芸が移植される時代であるといい、「全く以て好適な土壌と出会うことで、学芸は一世紀以上もの間…急速に発展する」(5:158)という。けれども、ローマにおいてなによりも学芸の繁栄は、「驚くべき高み」から下降した退廃の時代である、キケロ、セネカ、タキトウス、プルタルコスらの輩出する共和政末期から帝政初期に最盛期を迎えるとみるのが自然であり、ヒュームの本意は判然としない。

ちなみにヒュームと同時代人モンテスキューは、1734年にいわゆる通説を支持し、ローマが強大になった理由を端的に、

「古代共和国の創設者は土地を平等に分配した。これによってのみ、人民は強力になりえた、すなわち、社会はよく統制されることができたのである。また、これによってこそ、よき軍隊が作られ、各人が祖国を防衛するために、等しく、かつ非常に大きな関心をもつことができたのである。」(9:35)

と指摘し、ローマの愛国心の由来と強大化の理由を説明すると同時に、ローマが直接の利害を有する中部イタリアから外に歩を進めた時、換言すれば貧富の差が生じ富が富を求めた時に、共和制ローマの変質が生じたことを見破るが、ローマの退廃の原因を「政治組織上の欠陥と果しない征服戦争」だけに求めるヒュームにそれらの欠陥そして外征の理由ないし原因を見ぬく視角はない。

それはさておき、ヒュームが古代ギリシアの学芸をいかなるものと了解していたかみてみよう。

現代のある科学史家は、古代ギリシアの学問は一般に理論に非常に勝っているが、実地の観察において非常に劣っていると指摘する(11:153)。また、別の歴史家は、ギリシア社会の特色はその手頃の大きさに規定されている。ポリス社会は全員参加しうること、つまりその社会で行わ



れる各種の営為は「アマチュア的」(8:209)であることを大前提としていると主張する。これらの指摘は、本質において同一であり、理論に専心し観察ないし観測という専門的技術的な営為はギリシアでは排除されたことを示唆する。この点にヒュームが気付いたかは判明でない。しかしヒュームが主張する人々また都市の間に競争が生じ陶冶が進むという説は、上にみた歴史観察からも首肯されない。なぜなら、そもそもギリシアではある理論にかんし、その妥当性を観察ないし観測により検証するという視点は、全く欠落しているからである。歴史的にみても、ヒュームのいういわば目的論的議論と異なり、学問において陶冶が進展することはなかった。ヒュームがいうように他国の者がデカルトやニュートンの説を批判的に検討し、その吟味された長所だけを受け入れたということは、古代ギリシアにおいてなかったのであり、狡隘で近接してある町の一つに生じた見解はただ固執して主張されるだけであつた。陶冶はいわば神話であつた。

古代ローマにおける学芸は、本来ギリシアのものが移植されたとみる。そして、このヒュームの視点が判然としない点については既にふれた。

さて、上にみてきたヒュームの見地において最も注意しなければならないことは、ヒュームが見るところの学問芸術がいかなるものであつたかは歴史事実にまして判明でないことである。処女作『人生論』において、古代ギリシアにおいて自然学の確立は人間学ないし精神学のそれに数十年先行し、同じく当代のイギリスにおいても両者の隔りは数十年である(7:xvii)といい、「人間学の基礎の上に…数学、自然学そして自然神学も成りたつ」(7:xv)という見解を示すが、この人間中心の視角は、既に「諸学の大革新」を目ざすベーコンにより示されている。大革新の第一歩として「古いものの完成とともに、新しいものへの道」(2:22)を得ることを狙う。これは単に古代・近代の学問の優劣を比較するという無益な努力ではなく、「古いものの仕上げ」と、「より先のものの追求」(7:22)をなすためである。そして学の目的は、

「論法ではなくして技術を、原理に合うものではなくして原理そのものを、蓋然的な理由ではなくして実地へのしるしと指標とを見出すこと」(7:24)

にあるとベーコンは主張する。が、このような実用の技術知識の利点を強調しながらも、ベーコンは「印刷術、火薬および航海用磁針」という「世界の様相と状態とを変革」した近代においてのみ、

「発見された事物の力と効能と結果とを見まもることが望ましい」(7:114)

という。何故なら、これらの事物が人間の野心の三つの種類すなわち「自己の力」、「祖国の勢力と支配」そして「諸悪と奢侈」(114-15)の拡張の手段に転ずることをベーコンは見破るからである。人間の事物に対する支配はただ「技術と知識のうち」(7:114)にあるのであり、その用い

方により善悪いずれかが現出されるのである。したがって、ベーコンは「正しい理性と健全な宗教」とが唯一誤りに陥らぬ舵取りになるというのである。

これに対して、ヒュームが学芸の本性について自己の考想を表明する箇処は少ない。『人間知性研究』において学問知識の大道は「邪心のない好奇心」(6:6)にあると主張し、同書の巻末において、神学ないしスコラ形而上学にかんする書物を手にしたら、それが「量や数にかんする何らかの抽象的な思考」もしくは「事実や現実存在にかんする何らかの実験的論考」(6:165)を含んでいるか問うことを推薦する。そして答が否であれば、

「その書を火中に投ずるがよい。というのは、それには詭弁と妄想以外の何物も含まれおりえないから」(6:165)

と断じる。ヒュームがこの書を火に焼べるという考想を得たのは、当代に広く読まれたといわれるイエズス会士の中国からの書簡<sup>(13)</sup> もしくはおそらくそれらの一つを見て古代・近代論争において取り上げたテンプルによる記述すなわち古代中国のある王は、歴史が自分から始まることを狙い、

「自然学と農業にかんする書物を除いてあらゆる書を火に焼べることを命令した」(15:441)

によるものであろう。ヒュームがテンプルに親しんでいたことは『小論集』において数ヶ所で言及し、第三の小論においてもかれを「雅趣を心得えた文筆家とは見なせない」という批評を示していることから明らかである。

それはさておき、ヒュームが断ずるように「量や数にかんする抽象的思考」または「事実や現実存在にかんする実験的論考」が含まれていないならば、それは「詭弁と妄想」であり、火に焼べるべきものであると断じることが可能であろうか。

ヒュームが目ざす「量や数にかんする抽象的思考」や「事実や現実存在にかんする実験的論考」は、あくまで合理的で部分的な真理観、すなわちそれらの考想が与える説明は所与の条件下で合理的技術的にその部分にかんし真であるという考えを根底としている。逆にいえば、その考想が与えない部分についての説明が、「詭弁と妄想」であると断定することを禁欲することにおいて成り立つ真理観である<sup>(14)</sup>。明らかにヒュームはかれの領分からここにおいて逸脱しているのであり、かれがいうべきことは、それらは「信条」の問題であり、かれのいう「抽象的思考」や「実験的論考」には馴染まないことがらであるということである。

『人性論』第一編から『人間知性研究』にいたるヒューム哲学の中心問題は、蓋然的な知識の本性の解明にあり、「事実や現実存在にかんする実験的論考」についての諸問題の検討がその急務であった。しかしながら、「実験的論考」に馴染まない思念を、端的に「詭弁や妄想」と断じ

排することは、あまりに性急であり軽挙である。しかし、そのような結論は性急だといえ、着実に学問・知識の本性を追究することを一方において試みながら、他方におけるたとえ本来「週刊紙」の目論みで書かれた小論において、上にみたような判然としない、むしろ混乱した意見を同じ時期に示していることは一体何故なのか。

ふり返りみればヒュームが、初めに「週刊紙」として構想した小論であるということは、これらの議論の性格をよく表現しているのではなからうか。第一、第二、第三の小論は既にみた通り、細部において様々な食違いを示す。しかも、ヒュームは多数の削除・追加を他において試みたにもかかわらず、これらを放置する。理由は何かと考量するならば、これらの議論は厳密な学的論証であることを意図していないことに注目しなければならない。学的論証とは異なる次元においてヒュームは立論していると考えなければならない。それらは、殊に『小論集』第二部となった『政治論集』は、政策的提言であると理解すれば、本来の「経験事実」からの乖離も納得することができよう。奢侈ないし生活洗練が、別の怠惰や無為という毒の「解毒剤たり得る」毒であるという主張は、ベーコンが見破ったようにそれらの進歩・発見が「自己の力」「祖国の勢力と支配」「諸悪と奢侈」などをも同時にそのものとして拡大させるものであるとしても、ある国において「政治的支配における寛容と穩健」を実現する役に立つという事実は否定できない。別の視点に立ちとらえるならば、ベーコンはいわば奢侈や生活洗練が相対的に既にかかなりの程度実現された環境において、事態を検討しているのに対し、ヒュームが「奢侈や生活洗練」が別の毒の「解毒剤たり得る」と主張するとき、ヒュームが目撃する状況において、まだ「奢侈や生活洗練」は実現されていないのである。ある国において「寛容と穩健」とが実現することは、「奢侈と生活洗練」に浴していない国々に対してそれら進んだ国々による「苛酷で峻厳な支配」(5:303)をもたらずとしても、ヒュームはそれの実現を推進することに逡巡しない。ヒュームにとって、「生産への熱意と知識に対する欲求と人間らしい感情」とが均衡をとれた割合において母国において実現されることが急務である<sup>(15)</sup>。

このような政策提言の便宜として、ヒュームが学芸ないし技芸の発展を論じていることは、第一の小論において初めにたてた一般原則においてうかがわれる。「偶然」にもとづく事象と「原因」とに由来する事象に区別し、学芸の生成は「一般的な原因および原動力によって説明することが或る程度可能」といったが、このヒュームの主張を支えるのは、ギリシアにおける学問の進展という目的論的議論一つでしかないことは既にみた。このような目的論を何故ヒュームが主張したかを考慮すれば、当時のヨーロッパにおいてニュートンやデカルトの説を厳しく批判的に検討しその長所をとりあげとりいれることが、たとえ限られた領域であっても実現しており、いいかえればきわめて一般的な原則として学問知識の陶冶が国境をこえて進展しているならば、それを拡大して、技芸において、そしてさらに国々のまた人々の様々な営為にかんしていくらかかり

とも実現することを期待してヒュームは発言しているのである。

要するにヒュームが学芸の歴史そしてその本性にかんする解明において示した見解は、つぎのところ「奢侈や生活洗練」の実現が、「政治的寛容や穩健」を実現化し、「生産への熱意と知識に対する欲求と人間らしい感情とが互いに断ちがたく」結びついた状況を現実のものにすることを急務としているかれの信条から発しているのである。今日のわれわれが「奢侈や生活洗練」が「無為や怠惰」よりも現実に有徳であり幸福であるという主張を首肯するにはあまりに反対の事例を既に見ているとしても、十八世紀前半の社会的現実をまえにしてヒュームが提言するにあたって、学芸の進展の経緯を目的論的に理解し開陳することを非難するにはわれわれがあまりに安逸にあることも事実である。ヒュームが的確に把握した事実は唯一つ、すなわち十七世紀末からのヨーロッパにおけるデカルトやニュートンの説を批判的に国境にこだわりなく受容されたという例外的な事実であり、これを抛り所に学芸の合目的な進歩を読みとろうとすることは決して非難できないが、事実は事実として捉えなければならない。

#### 註

(1) 引用は下に示す文献表の諸版による。前の数字は文献表中の著作番号、後の数字は頁数を表わす。

(2) 『小論集』 *Essays, Moral and Political*. 1741. 第一版所収の小論は以下の通り。なお、『小論集』、『政治論集』、『三小論集』は(5)から引用した。

1. Of the Delicacy of Taste and Reason.
  2. Of the Liberty of the Press.
  3. Of Impudence and Modesty.
  4. That Politics may be reduc'd to a Science.
  5. Of the first Principles of Government.
  6. Of Love and Marriage.
  7. Of the Study of History.
  8. Of the Independency of Parliament.
  9. Whether the British Government inclines more to Absolute Monarchy or to a Republic.
  10. Of Parties in General.
  11. Of the Parties of Great Britain.
  12. Of Superstition and Enthusiasm.
  13. Of Avarice.
  14. Of the Dignity of Human Nature.
  15. Of the Liberty and Despotism. (Of Civil Liberty.)
- (3) 『小論集』第二版所収の論題を示す。
1. Of Essay Writing.
  2. Of Eloquence.
  3. Of Moral Prejudices.
  4. Of the Middle Station of Life.
  5. Of the Rise and Progress of Arts and Sciences.
  6. The Epicurean.

7. The Stoic.
  8. The Platonist.
  9. The Sceptic.
  10. Of Poligamy and Divorces.
  11. Of Simplicity and Refinement in Writing.
  12. A Character of Sir Robert Walpole.
- (4) 『政治論集』 *Polical Discourses*. 1752. 所収の小論は以下の通り。
1. Of Commerce.
  2. Of Luxury. (Of Refinement in the Arts.)
  3. Of Money.
  4. Of interest.
  5. Of the Balance of Trade.
  6. Of the Balance of Power.
  7. Of Taxes.
  8. Of Public Credit.
  9. Of Some Remarkable Customs.
  10. Of the Populousness of Ancient Nations.
  11. Of the Protestant Succeseion.
  12. Idea of a Perfect Commonwealth.
- (5) 『著作集』 *Essays and Treatises upon Several Subjects*. 1753-54 初版は二巻本で出版された。
- (6) 『三小論集』 *Three Essays, Moral and Polical*. 1748
1. Of National Characters.
  2. Of th Original Contract.
  3. Of Passive Obedience.
- (7) 諸版の異同また形成の経緯については、グロース解説 (5: 15-86)。
- (8) ベントリ(8), ブラウン(4), スウィフト(14), テンプル(15)。
- (9) ウォレス師との約十年間の意見交換ののち、『政治論集』に収録された。なお、ウォレス(10)。
- (10) ニュートン学のフランスにおける批判的継承が、ヒューム哲学のそもそもの前提になっていることは別稿において論じる予定である。
- (11) ニーダム(10)。特に第一, 二章。
- (12) 「視野を古代に限局」したといわれるのはシャフツベリ (13: 145ff) であり、「われわれの政治形態に過度の偏愛」をもつといわれるのはアディソン (1: III, 22) である。
- (13) テンプルはイエズス会士の中国報告に親しんだといわれる (D. N. B.)。清代イエズス会士の中国書簡集は当代において広く読まれ、十八世紀中葉までに30巻以上英仏語で出版されたが、清朝初期の書簡には焚書抗儒に触れるものはない(17)。テンブルがいかにかこの知識を得たかは不明であるが、上流階級に接触する機会がより多くあったおそらく明代末期に渡来した会士のものによると思われる。
- (14) 現代における科学観にかんしては佐藤 (12: 39ff)。
- (15) ヒュームの政治的立場については別の機会に触れたい。

#### 文献

1. Addison J. *The Spectator*. ed by D. Bond. (Oxford. 1965)
2. Bacon, F. *Novum Organum. The Works of Fr. Bacon*. ed by J. Spedding, R. L. Ellis and D. D. Heath, Vol IV. London, 1858. rep. 1963. (ベーコン『ノヴム・オルガヌム』桂寿一訳, 岩波文庫,

1970)

3. Bentley, R. *A Dissertation upon the Epistles of Phalaris, Themistocles*. Second edition, 1697.
4. Browne, J. *Pseudodoxia Epidemica*. (Oxford, 1981)
5. T. H. Green and T. H. Grose (eds.) *The Philosophical Works of David Hume*. The new edition, Vol. III. London, 1882. rep. 1964.
6. Hume, David, *Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals*. ed by L. A. Selby-Bigge. Third edition ed. by P. H. Nidditch. Oxford : Clarendon, 1975.  
(ヒューム『人間悟性研究』福鎌達夫訳 彰孝書院 1948)
7. ditto. *A Treatise of Human Nature*. ed. by L. A. Selby-Bigge, Second edition ed. by P. H. Nidditch. Oxford : Clarendon, 1978. (ヒューム『人性論』大槻春彦訳 岩波文庫 1948)
8. Kitto, H. D. F. *The Greeks*. Harmondworth, Penguin, 1951. (キトー『ギリシア人』向坂寛訳 勁草書房 1966)
9. Montesquieu, Baron de *Considérations sur les causes de la grandeur des Romains et de leur Décadence*. 1734. (モンテスキュー『ローマ人盛衰原因論』田中治男, 栗田伸子訳 岩波文庫 1989)
10. Needham, J. *The Grand Titration : Science and Society in East and West*. London : Allen and Unwin, 1969. (ニーダム『文明の滴定』橋本教造訳 法政大学出版局, 1974)
11. Ouirk, G. S. (カーク「ギリシアの自然科学」, ロイド・ジョーンズ編『ギリシア人』所収 三浦一郎訳 岩波書店, 1981)
12. 佐藤文隆『宇宙論への招待』岩波新書 1988。
13. Shaftesbury, Earl of, *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, 1711.
14. Swift, J. *A Tale of a Tub*. 1704. (Oxford, 1984/1986)
15. Temple, W. *An Essay upon the Ancient and Modern Learning*. Miscellanea. The Second Part. 1690.
16. Wallace, the rev. R. *A Dissertation on the Numbers of Mankind*. 1753.
17. 矢沢利彦編訳『イエズス会士中国書簡集』(東洋文庫) 平凡社, 1970～